

# 林京子「九日の太陽」に寄せて

村上陽子

林京子には「九日の太陽」(『新潮』一九九二年二月)と題された随筆がある。林が長崎の大学教授とその友人、そして学生という戦後生まれの同行者とともに、自分自身が被爆した際に逃げた道筋をたどって八月九日の長崎を歩いた体験を描いたこの文章にはじめて触れたとき、私は体験を語る言葉を検証する過程で露わになる記憶の不確かさや、体験を持たないものがそれを想像することの困難さに注目していた。しかし、あらためてこの文章を読み返してみると、いま・ここを生きる人間が各々の立場から体験への向き合い方を模索し、体験を分かち合う実践が行われているように思える。八月九日への旅は、作者⇨体験者から読者⇨非体験者へ、年長者から若い世代へ、という一方向的な体験の授受ではなく、むしろ『祭りの場』という作品を介することで構築された関係性の中で、『祭りの場』の主人公である「わたし」の体験が波紋を広げていくような出来事だったのではないかと。

逃げた道をなぞってみよう、と林が思い立ったのは、『祭りの場』に従って一人の動員学徒が逃げた道を追体験した学生たちの「綿密な報告書に刺激されたから」であった。八月九日への旅は、

『祭りの場』を頼りに戦後の街を歩き、報告書を作成した戦後生まれの人々の言葉と行動に触発されて実現したものなのである。

初発の動機として、林には「忠実に書いたつもり道筋を、作品を頼りに彼らがどのように歩いてくれたか。記述は正確に伝わったか。果たして正確であったか。自作の検証にも興味があった」という思いがあった。しかし、実際に歩き始めると、林は正確さを検証する者としての役割を十分に果たすことのできない自分を見いだす。学生たちが予想した被爆現場に案内されても、「第二通用門はここでしたか」と学生に尋ねてしまうほど、街は変容を遂げていたのである。また、同行の女性が『祭りの場』の記述にある「三本煙突」という言葉を口にした瞬間、林の目には「二本煙突の黒く煤けた姿が、木立のなかに浮き出てみえ」、「煙突は二本です」と自作を否定する言葉を発してしまうという場面もある。調査の正確さの検証は、同行者も期待するところであり、それを感じ取った林は「劇的な直感でみんなを喜ばせたいサービスピリット」が自分のうちにくすぶるのを感じている。しかし、その欲求は抑え込まれ、作者が事実を断定できない曖昧さは、同行者にも認識されていく。

爆心地の松山町で、盆地の町を見下ろしながら、学生と林は次のような会話を交わす。

町は、といってB君が、想像できないんです、当時も家が密集していましたが、と街をみて聞いた。町工場が軒を並べた愛すべき町だった、とわたしは答えた。(中略)

車が走り洗濯物がひるがえり、クラクションが聞こえる街

を目の前にしていると、盆地全体をグラウンドに見立てることなどとてもできない、とB君がいった。反対に、車も洗濯物も家も、駆けている小学生も岩屋山の緑までが、これだけのものが一瞬に消えてしまったとしたら、とわたしはいった。そういつて、お日さまはちようど、と視線の先の山の端をさした。向きあつた空のどこにも、太陽はなかつた。

あれ、とわたしは、とんきような声をあげた。それから慌てて空に太陽を探した。九日の太陽は、確かに、段段畑に立つわたしの視線の先で、真つ赤に燃えていた。太陽の落つちやゆるう、落ちていく陽をさして、被爆者たちは叫んだ。

目の前に在る筈の太陽が、広い空のどこにもない。四十七年間在り続けた太陽が、四十七年目の八月九日の空にないのは、どうということなのだろう。

B君と呼ばれる学生の言葉は、八月九日の痕跡をほとんど残さない街に傷跡をさぐることの困難を伝えている。彼の目は、現在の日常の光景を実体として捉えており、その実体がかつて起きた破壊とそこで死んだ人々への想像を阻む。林は、B君に対していま目に映るものすべてが失われることへの想像力を喚起しようとしながら、確かに自分が見たはずの、九日の太陽の不在を認めてしまう。想像できない、という学生の前で、実際に見た光景を説明しようとして、説明しきれない出来事が出現してしまうのだ。

八月の真昼の太陽は、記憶よりもはるかに高い位置にあつた。林の若い同行者たちが、傷のない街に見いだそうと努め、その

痛みを想像しようとした傷。八月九日への旅は、その傷の在処を明確にするためのものだったはずである。しかし、四十七年目に辿り着いた同じ場所で、忘れることのできない記憶や言葉とは異なる太陽の位置に、林は出会う。林にとつて、傷は街ではなく、自分の体に刻まれたものであつた。それはすなわち、傷が自分という存在と切り離すことのできないものとなつてゐることを意味する。だが、長崎の街は変容し、林自身に深く刻まれた記憶とは異なる光景が眼前に突きつけられる。その体験は、自分自身が辿つてきた道筋が虚像の上に成り立つていたのではないか、という疑いにすら発展する。林は四十七年前の「虚像の太陽」と、現在の「正常な位置に姿を現したお日さま」、二つの太陽を胸に抱くことになる。

林の戸惑いは、同行者たちにも伝わつていよう。煙突の本数や太陽の位置のように、作品の記述との齟齬は同行者との会話の中で見いだされているのだから。検証の過程において、同行者たちは、記憶を探る林にあれこれ尋ね、地図や現場と引き比べて正確さを検証することに余念がない。しかし、最後の最後に出現する太陽の位置の矛盾は説明できない。『祭りの場』を精読した読者が作者の体験をなぞり、そこから生まれた言葉が作者に差し戻され、作者と読者が同じ道を歩きつつともに揺れ動く中で、二つの太陽はもはや林一人のものではなくなつてゐるのではないか。想像できないことに立ち止まり、正確に検証できない現実を抱えていく先に続く未来に、体験を分かち合うことが目指されているのではないか。そのように思えるのだ。